

平成21年度 【 学園研究費助成金< B > 】 研究成果報告書

学部名 人間関係学部

フリガナ フジワラ ナホ
氏名 藤原 直子

研究期間 平成21年度

研究課題名 フェミニスト・ペダゴジーの理論動向 2000年以降を中心に

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	藤原 直子	人間関係学部	准教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字~300字程度で記述)

1980年代から欧米を中心に展開してきたフェミニスト・ペダゴジーは、2000年代に入り理論研究および教育実践研究に関する著書・論文が数多く蓄積されている。日本におけるフェミニスト・ペダゴジーに関する研究は、女性学教育、ジェンダー教育などの研究分野において見受けられるが、その数は欧米の比にならない。

そこで、本研究では現在のフェミニスト・ペダゴジーに関する研究動向の輪郭を描き、今後の日本におけるフェミニスト・ペダゴジーの発展に向け、その方向性を探究することを目的とする。

2. 研究方法等 (300字以内で記述)

これまでのフェミニスト・ペダゴジーに関する文献を中心に考察し、フェミニスト・ペダゴジーの理論的な枠組み及び特徴と課題について指摘した。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

フェミニスト・ペダゴジーは、P・フレイレの解放教育学や P・マクラーレン、H・ジルーに代表される批判的教育学の一つの潮流に位置づけられる。これらの教育学の共通の前提としては、知のポリティカルな形式を生産するオルタナティブな教育学の構築、学習者のエンパワーメント、自身に関わる歴史的な意味連関を探究する批判的思考の促進が挙げられる。フェミニスト・ペダゴジーとは、teaching と learning のプロセスに関わるものであり、反省的实践を続ける中で自己に関与し、セクシズム、レイシズム、ホモフォビアなどの嫌悪を乗り越えるための闘争において他者と関わることであり、さらに知を高め、社会的変容に関与するものである。

1990年代に入り多くの実践が蓄積されるなか、理論的・実践的課題も多く指摘された。それはフェミニズムの視点から teaching と learning をどう理解するか、また高等教育においてフ既存のディシプリンに内在する規範とフェミニズムの視点を入れて教育実践を行うことの困難性、教室の中での教師・学生間の支配的関係の問題である。2000年代に入り、それらの問いは教師の権威を軸とした問題へとシフトする。それは、大学という構造の中で制度的に教師に課せられた権威と教育的関係における教師の権威という二つの側面である。それらの問いに対する现阶段の着地点としては、フェミニスト・ペダゴジーを実践する者は、自身の具現化された権威を自覚化し、社会的変容に向けて生産的に権力を行使するほかないこと、また教室のパワーポリティクスをふまえ、どのような行使の仕方が学生の学びをエンパワーするのか、反省的实践を続けることである。

現実の実践においては、社会的動向、教える文脈、教師の位置性と力量など多種多様な問いが生まれており、フェミニスト・ペダゴジーの実践の有効性と同時に限界についても認識することも必要であろう。しかしながら、批判的考察を重ねつつ、変容の可能性を探り続ける作業自体がフェミニスト・ペダゴジーの実践とも言える。今後の日本におけるフェミニスト・ペダゴジーの発展には、具体的実践の蓄積と制度的な課題そして個々の経験から見出される課題への取り組み、またそれらをふまえた理論的探究が必要である。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

① フェミニズム	② 教育学	③ ジェンダー	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

研究成果は、以下の紀要 (刊行予定) にまとめた。
藤原直子「フェミニスト・ペダゴジーの射程」椋山女学園大学『人間関係学研究』、2009年、第8号、pp.77-85.